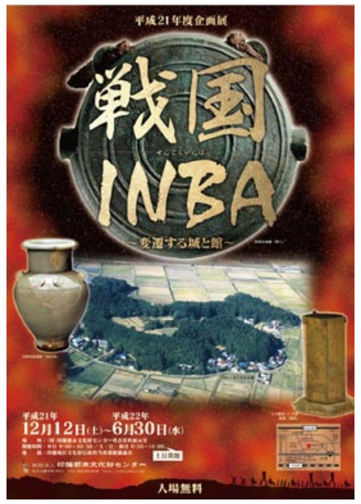
INFORMATION

《ご案内》

■企画展「戦国 INBA ―変遷する城と館―」開催中

当センター考古資料展示室にて、平成 22 年６月 30 日（水）まで企画展を開催しています。

今回は、戦国時代につくられた城や館が時代に応じてどのように変化してきたかを見ていきます。また、有力な戦国大名のはざまにあった印旛地域の状況をみていくことで、華やかで猛々しいイメージばかりではない戦国の日常の一端をご覧ください。


平成21年度企画展
戦国INBA
変遷する城と館
平成21年12月12日(土)～平成22年6月30日(水)
入場無料

《NEWS》

■台方宮代遺跡（2）現地説明会を開催

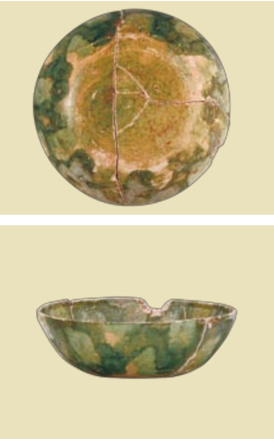
今回紙面でも紹介している成田市台方宮代遺跡（2）において、1月30日（土）に現地説明会を行いました。天気にも恵まれ、総勢 300 名もの来場者がありました。

《速報》

■尾上木見津遺跡から出土した奈良三彩

現在発掘調査が行われている酒々井町尾上木見津遺跡の平安時代（９世紀中ごろ）の竪穴住居跡から、ほぼ完形の二彩の椀が出土しました（写真）。緑色・褐色・白色の釉薬をかけ分けた優美な唐三彩の影響を受け、わが国でも奈良時代（８世紀）に奈良三彩と呼ばれる陶器がつくられました。三彩・二彩のほか、緑釉・褐釉・白釉の単彩陶も含めて一般的に奈良三彩と総称されています。三色のうちの白色は透明な釉薬を用いるため、生地を白色に焼き上げる必要があり、そのため他の陶器などに比べるとかなり低温で焼いているので軟質です。現在のところ、奈良三彩を製作した工房や焼かれた窯などはみつかっていませんが、都（平城京）の近くの官営工房で独占的な生産が行われていたと考えられています。三彩が出土する遺跡は、圧倒的に寺院跡が多く、仏具や供養具としての用途が主体です。墳墓から蔵骨器として出土するほか、集落から小壺などの祭祀具がまれに出土することもあります。

今回発見された二彩ですが、金属器の銅鋺を写したもので、かたちや製作技法に特徴があります。また、縁の一部分がわざと打ち欠かれ、半分に割られた状態で出土しており、何かの儀礼に伴って捨てられたものと考えられます。



この椀という器の種類のうち、二彩に限ると、正倉院に完形の優品が数点納められているほかは、興福寺一乗院跡や平城宮などで破片が何点か出土しているだけで、完全な形に復元できるものは発掘調査では初めての例となります。出土した竪穴住居の年代とは 100 年ほど間が開きますが、はるばるこの酒々井の地に、どういう理由で奈良三彩がもたらされたのでしょう。興味の尽きない大発見となりました。

《発掘中の遺跡》

がんばってます！

3月の予定

〈成　田　市〉	台方宮代遺跡（2）（古墳時代） 大菅向台遺跡第２地点（古代～中世） 小帝遺跡（中・近世）
〈酒 々 井 町〉	尾上木見津遺跡第２地点（古墳時代～中世）
〈富　里　市〉	駒詰遺跡第３地点（奈良・平安時代）

《室内作業》

こっちもやってます！

〈本部統合事務所〉

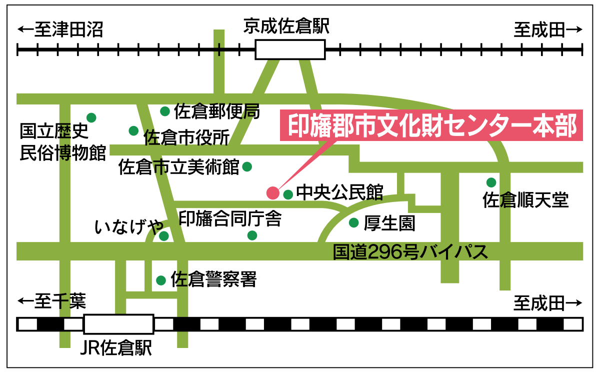
佐倉市鏑木町 198-3　TEL. 043-484-0133

道作古墳・馬場遺跡（第５地点）（印西市　古墳・縄文時代）

宮前遺跡（栄町　奈良・平安時代）

《おしらせ》

※上記の発掘現場、室内作業は見学できます。ご期待に添えない場合もありますので、かならず、事前にご連絡ください。詳細は本部へお問い合わせを！



■広報誌　フィールドブックvol.30　発行・編集　財団法人　印旛郡市文化財センター　〒285-0025　千葉県佐倉市鏑木町198-3　☎043（484）0126㈹　FAX043（485）9871　平成22年3月25日
http://www.inba/or/jp（iモード　http://www.inba.or.jp/i/）

FIELD BOOK

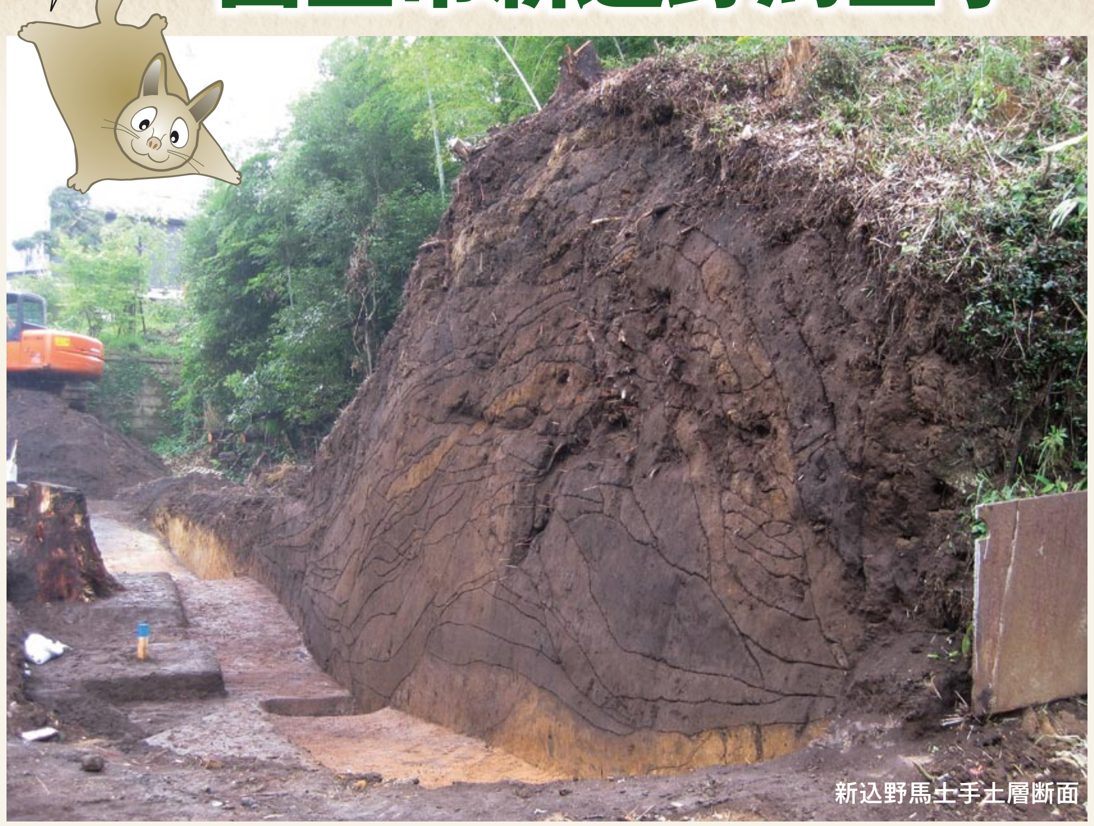
財団法人 印旛郡市文化財センター

広報誌　フィールドブック　vol.30

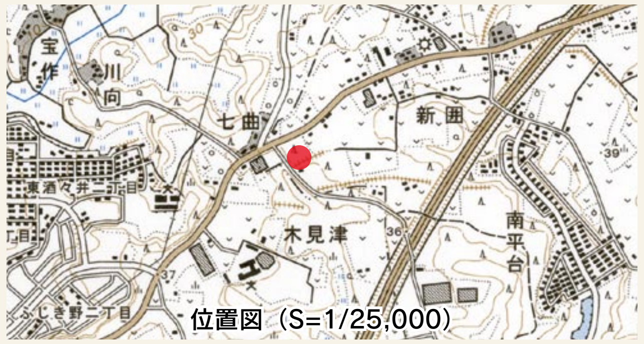
みつけた！

とみさと し しんごめ の ま ど て

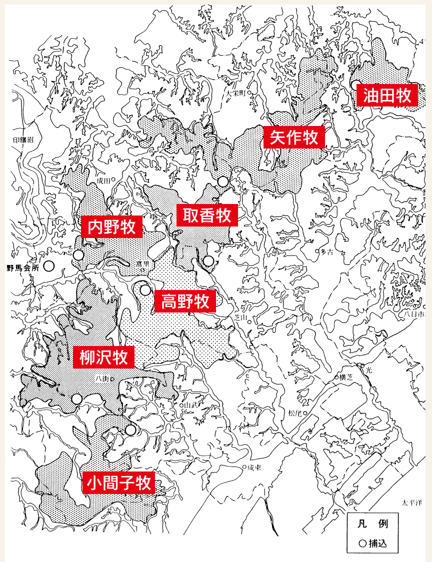
富里市新込野馬土手



新込野馬土手土層断面



位置図（S=1/25,000）



「大関大曲遺跡・柳沢牧・御成街道発掘調査報告書」
印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第3集より転載

東関東自動車道路富里インターチェンジから南西に約３km、国道296号線の富里市と酒々井町の境の南に位置する新込野馬土手の調査を行いました。

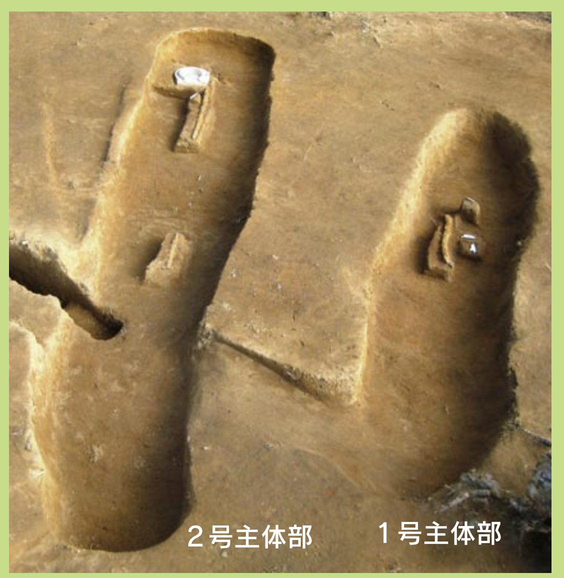
野馬土手とは、近世（江戸時代）に馬を生産するために幕府が設置した官営の牧において、放牧地などを区画するために土塁状に土を積んだ施設のことです。千葉県内に置かれた牧は、柏市や鎌ヶ谷市など東葛地区に広がる小金牧と房州地区の嶺岡牧、そして印旛地区に広がる佐倉牧とに大別されます。佐倉牧は「佐倉七牧」とも呼ばれ、油田（あぶらた）牧・矢作牧・取香（とっこう）牧・内野牧・高野牧・柳沢牧・小間子（おまご）牧の７つの牧がありました。

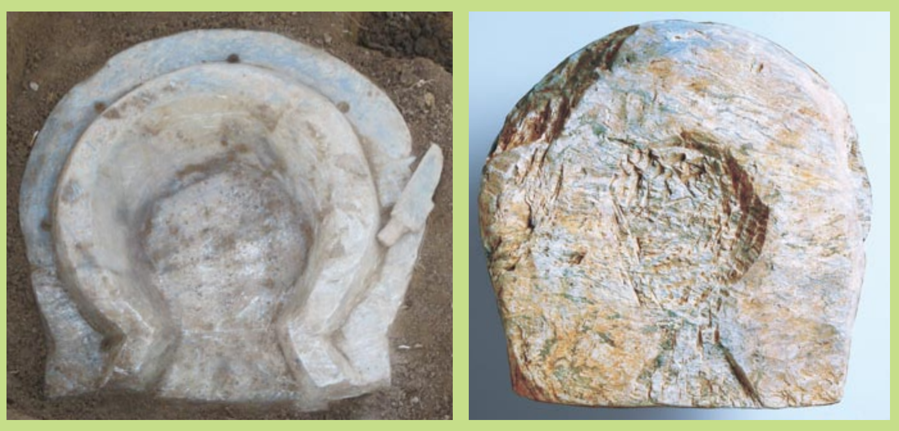
今回調査した新込野馬土手は内野牧に属するもので、高さが３ｍを越える大きな土手でした。この土手は、年に一度行われていた「野馬捕り」という行事の際に、放牧されていた馬たちを追い込む「捕込（とっこめ）」という施設に直接つながるもので、江戸時代に作製された内野牧の絵図面にも描かれています。現在、この内野牧の捕込は残っていませんが、今回調査した部分の東側、道路を挟んだ場所に所在していたと思われます。地名にある新込の「込」の字は、この捕込に由来するものになります。

土層の観察から、築いた土手が崩れると、その都度補修していた様子が確認されました。少なくとも大規模な補修だけで５回以上行われていたと思われます。

興味を持たれた方は、県内各地に残されている野馬土手を訪れて、馬の放牧されていた当時の風景を思い浮かべてみてはいかがでしょうか。

成田市 台方宮代（だいかたみやしろ） 遺跡（いせき）(2)

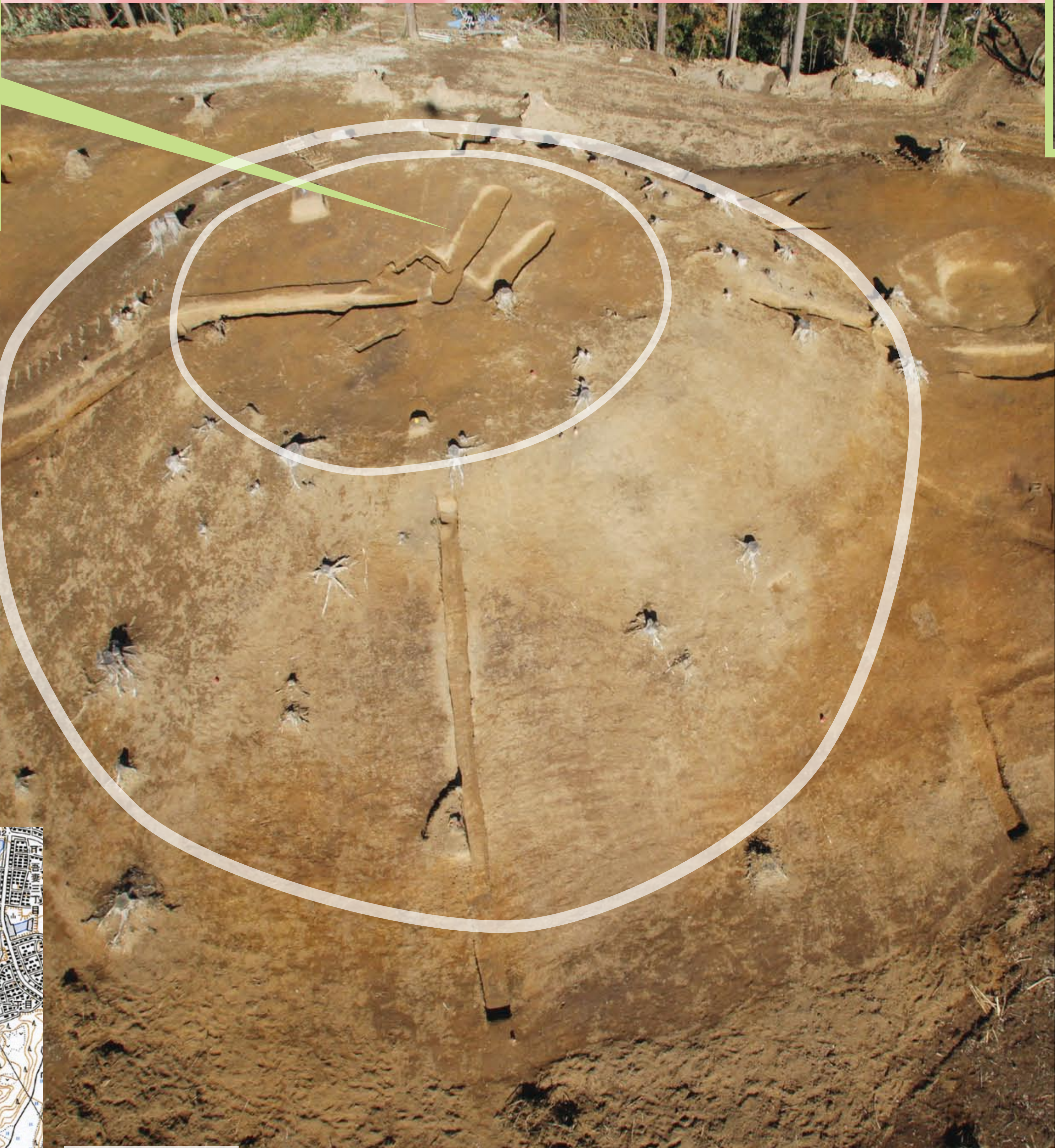




２号主体部出土石枕

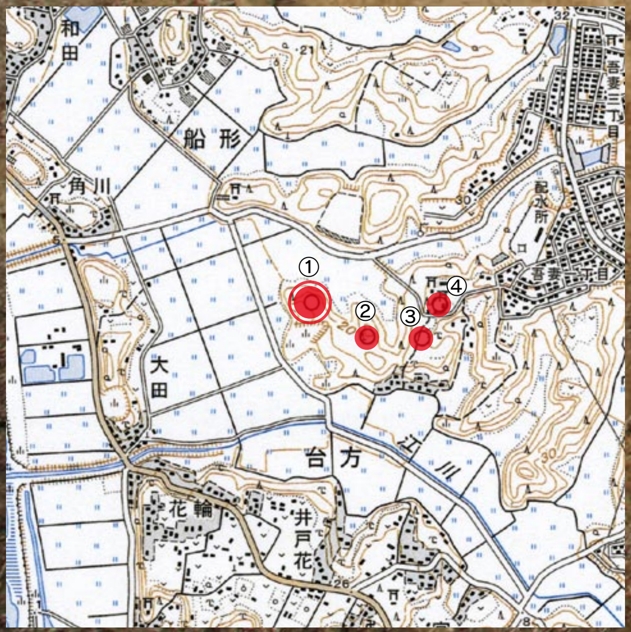
1号主体部出土　石製刀子(上)・鉄剣(下)

２号主体部出土　石製刀子(上)・鉄刀(下)



墳丘ライン

背景：１号墳（空撮）



1. 台方宮代遺跡(2)
2. 台方宮代遺跡
3. 船形手黒遺跡
4. 天王船塚27号墳

遺跡位置図（S=1/25,000）

台方宮代遺跡(2)は、印旛沼に注ぐ江川の下流、標高約23mの台地上に存在します。調査の結果、現在のところ古墳３基、弥生時代中期～平安時代の住居跡が９軒見つかっています。

１号墳は、直径が約30m、高さが約6mの円墳です。古墳の墳頂部からは、木棺を直接埋めた主体部と呼ばれる埋葬施設が、２基見つかりました。主体部は北東に頭を向けた形で見つかりました。１号主体部は長さ約3m、幅約0.75mです。出土品は鉄剣が１振、石製刀子２点のほかに、主体部の北東側から滑石製の臼玉がまとまって見つかっています。２号主体部は長さ約5.5m、幅約0.9mです。出土品は鉄剣と鉄刀が１振ずつ、石製刀子２点と、滑石製の石枕・臼玉が見つかっています。

見つかった石枕は、縦横共に約26㎝、高さ5㎝を測り、重さは8.1kgあります。滑石を加工してつくられており、高縁（たかぶち）と呼ばれる段をもち、頭を納める部分を彫り窪め「Ω形」に作り出しています。外側には、立花とよばれる飾りを装着する孔が７ヶ所ありますが、立花自体は見つかりませんでした。また、裏面には作りかけなのでしょうか。表面と同様の形に彫り窪めようとした跡が残っていました。これは、製作段階の状況を知ることができる貴重な資料です。以上の出土遺物から、１号墳は、古墳時代中期(５世紀前半)に作られた可能性が高いと考えられます。

本遺跡では、過去の調査でも鉄剣と滑石製の臼玉が出土した古墳が見つかっており、さらに隣接する船形手黒遺跡でも、石枕や立花・鉄刀・鉄鏃・ガラス製の小玉・勾玉・青銅鏡が出土した同時期の古墳が所在しています。今回の調査によって、これらの古墳は今まで確認されていなかった新しい古墳群である可能性が出てきました。周辺の古墳と合わせ、この地域の古墳の性格を改めて捉え直す必要があるでしょう。